# 東日本大震災

## 被災地そして海外から

東日本大震災から半年以上が経過しましたが、今もなお多くの方々が、不安や困難な生活を強いられています。何が起きたのか、何が起きているのか。そして、何ができるのか。

仙台と釜石、スイスやインドネシアに暮らす4人の同窓生に、貴重な経験を綴っていただきました。

（被災地の写真は土肥守さんが提供してくださいました）

### 釜石から

## 東日本大震災を経験して

独立行政法人国立病院機構・釜石病院院長
土肥　守（中部28回卒）

富山中部高校の同窓会の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。現在、国立釜石病院の院長をしておりますが、釜石に赴任して11年目、院長になって8年目になります。

平成23年3月11日の東日本大震災では、インフラや通信の途絶だけでなく、慣れ親しんだ多くの土地や、多くの知己・友人が犠牲になり、大変苦しい思いをしております。

地震・津波の直後は、全く情報が伝わらず、どうなっているか分からないまま、病院の機能と患者さんの生命を守ることに専念しまして、外部との連絡が出来るようになってからは、被災・崩壊病院からの重傷患者受け入れ、各地からの災害医療班へのサポート、外来での災害処方箋の発行、被災された診療所への支援、避難所にいる乳幼児の入浴サービスなど、病院にこもりきりになりながらも、寝る間を惜しんで、目まぐるしく活動いたしました。こういった時の集中力や持続力は中部高校仕込みというところでしょうか。

震災後、2カ月ほど経過しまして、忙しさがピークを過ぎましたので、自分の経験、患者さんや知人からうかがった体験、スタッフの活動やその効果などの経験を、後世に残したり、これから地震・津波の被害が予想される地域で役立ててもらいたいと思うようになりました。

そこで、たまたま避難所に避難した看護スタッフがどの様に行動すれば良いのか、というコンセプトで、「避難所ナーシングノート」を企画し、被災された医療機関のスタッフからアドバイスをもらったりして、この8月26日にメディカ出版から出版いたしました。看護師さんだけでなく、避難所の運営に関わるかもしれない方、一般の方にも役立つ内容となっております。

また、印税はすべて被災地の復興に役立てる予定になっておりますので、ぜひ、ご協力いただければ幸いです。

皆さまのご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

避難所ナーシングノート